

幼児の学びをアセスメントするための指標構築に関する研究

佐藤 康富（初等教育学科・教授）・小泉 裕子（児童学科・教授）

原 孝成（初等教育学科・教授）・大野 和男（児童学科・准教授）

札本 晃子（初等教育学科・准教授）・森本 壽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）

上田 陽子（鎌倉女子大学幼稚部・教諭）

1. 研究の目的

（1）研究の背景と目的

近年、保育の質に関する研究が盛んに行われている。特に、この質の問題は教育への投資として、国レベルでの教育政策とも絡んでいる。一口に保育の質といっても、3つの質があげられる。その1つが構造の質である。ここでいう構造の質とは、子どもの数に対する教員の数、あるいは保育室の面積、園庭の広さ等の数値で表すことのできるものである。2つ目は結果の質である。その教育・保育を受けるとどのような効果があるのか、わかりやすい例は読み書きができる、ペーパーテストで測れるというようなアウトカムの質である。3つ目の質は過程の質である。これは数値に表されるというものではなく、子どもと教師がどうかかわるのかというプロセスの問題である（秋田、2009）。

とりわけ、このプロセスの問題に焦点を当て、保育への投資を先導したのがヘックマンの研究である。アメリカの経済学者ヘックマンの研究によると、成人してから再雇用する費用より幼児期に良質の教育を施す方がより少ない費用で済み、リターンが大きいとの試算がなされた。これにより、各国は積極的に乳幼児に先行投資するようになってきた。アメリカは貧富の格差、貧困、非行、不就労者の問題を抱えている。この時、ヘックマンがモデルにした幼児教育はアメリカのペリースクールでの実践である。幼児期に貧困の家庭の子どもでも、成人してから非行に走ったり、不就労者の率が低かった保育がペリースクールの教育であった。このペリースクールの幼児教育の実践は読み書きなどのリテラシー教育に力点をおいたものではなく、子どもの興味関心を大事にし、子どもの努力や粘り強さに焦点を当てた保育であった。

また、この保育の質の問題に積極的に発言してきたのがOECDである。国際的に学力評価を積極的に行ってきたOECDは、乳幼児教育の分野でもStarting Strong II（OECD保育白書2011）という報告書を出し、大きな影響を与えている。この報告書で注目を集めているのがイタリアのレッジョの保育とニュージーランドのラーニング・ストーリーである。ここでいうニュージーランドのラーニング・ストーリーとは幼児の学びをアセスメントするものである。もちろん、今までも幼児の学びを評価する研究は行われてきた。幼児の読み書き、数に対するリテラシーの研究は数多く行われてきた。最近、内田伸子らによる日本・中国・ベトナムの3か国における読み書きのリテラシー研究によると、そのリテラシーの能力を促進する要因は早期に教育することではなく、どのように親や大人が子どもとかわるのかというプロセスにあることが明らかにされている（内田、2012）。また、欧米で保育の質を判定する尺度として用いられているものに、環境評価スケール（Harms、

2008)がある。これはチェックリストによる評価というものである。しかしながら、そのいずれもが幼児の学びを包括的に評価するものとはいえない。

前述のニュージーランドのラーニング・ストーリーは、幼児の学びを今までの方法とは違うやり方でアセスメントするオールタナティブな評価方法である。このラーニング・ストーリーは子どもの学びをアセスメントするといっても、それは幼児の学びの結果をできたか、できないかをチェックリストで評価するようなものではない。これを考案したカーは、どのように幼児が学びへ向かうのか、その「学びの構え」を評価するものである(Carr, 2001)。この「学びの構え」(disposition)は5つの視点、「興味をもっていること」「夢中になっていること」「チャレンジしていること」「自分を表現していること」「他者の役に立つ、貢献すること」からなされている。

そこで、本研究ではカーの提案する5つの「学びの構え」を参考にしながら、日本の保育や幼児の現状に即した学びの評価指標及び評価方法の開発を行うことを目的としている。

(2) ラーニング・ストーリーについて

次にカーの考案したラーニング・ストーリーについて詳しく説明を加える。ラーニング・ストーリーとは子どもの学びをアセスメントするものである。日本ではアセスメントは評価と訳され、子どもの学びの結果を査定したり、学びの結果をチェックリストで評価することが多い。しかし、ここでの幼児の学びはチェックリストによって評価するのではなく、幼児が学びへ向かう姿勢、構えをナラティブな形式で評価するのである。ここでアセスメントを評価と書くと従来の意味で捉えられてしまう危険性があることから、アセスメントという言葉をもそのまま用いる。ではなぜ、ナラティブな形式でアセスメントするのか。それは、幼児の学びを個人の能力、結果として捉えようとするのではなく、社会文化的活動への参加として捉えようとするスタンスがあるからである。ロゴフは発達をその地域で生活する文化の一員として、その社会において価値づけられた社会文化的活動へ参加すること、その「参加の範囲や種類=レパートリー」が量的にも質的にも豊かになることだとしている。このような社会文化的アプローチの立場に立つならば、「学びとは周りの人々、場所と物との応答的で相互的な関係を通して達成せられるもの」として捉えられる。したがって、このような学びは単純化されたチェックリストのようなものでは捉えることができないため、ナラティブなエピソード的な記述を必要とする。

次に、その学びをナラティブに記述する5つの観点についてみていこう。ロゴフは発達とは社会文化的活動の参加の変容であるとした。つまり、ここで問題となるのは、「できる・できない」という学習観ではなく、学びを何か意味ある活動への参加と捉えようということである。学びを意味ある活動への参加とみると、やらないのではなく、関心はあるが行動には至っていない、意欲はあるが適切な参加方法が見当たらないなどの状態が見えてくるし、また、それに対する適切な援助を考えることができる。そこで、カーは幼児の学びを結果としてではなく、学びへ向かう姿勢、意欲を **disposition** と定義したのである。そして、これを「興味をもっていること」「夢中になっていること」「チャレンジしていること」「自分を表現していること」「他者の役に立つ、貢献すること」の5つの観点からアセスメントした。つまり、ここでは「参加しようとする行動」、「興味をもっていること」等にフォーカスを当て、子どもの足りない点に目を向けていくのではなく、「子どもの参加しようとする」「子どもの長所」をアセスメントしていく「信頼 (credit)」モデルへの転

換が試みられている。

2. 研究方法、研究計画

(1) 研究方法

研究方法としては、主に参与観察とアクション・リサーチを行う。研究対象は鎌倉女子大学幼稚部の園児で、幼児の遊びの場面をVTR及びフィールドノーツで記録しながら、学びの構えの5つの観点からそれらを分析する。参与観察は研究者が行い、収集した観察データの読み取り、分析においては研究者と保育者が一緒にカンファレンスし、今後の保育の方向性や指標の妥当性を検討するというアクション・リサーチの方法を用いる。

また、ラーニング・ストーリーを実践しているニュージーランドの保育施設を訪問し、ラーニング・ストーリーの有用性、その効果、また、現在の課題等について、保育施設で実際従事している保育者に半構造化インタビューを行う。インタビューはVTRで記録し、コーディングし、分析する。

(2) 研究計画

本研究は、平成26・27・28年度の3ヵ年計画であり、研究計画は以下の通りである。

① 平成26年度

鎌倉女子大学幼稚部において、幼児の参与観察・アクション・リサーチを行い、学びの指標の妥当性、効果を検討する。また、ニュージーランドの保育施設において、ラーニング・ストーリーの活用事例、その効果、学びの観点についての調査を行う。ラーニング・ストーリーに従事している保育者と交流し、その妥当性を検討する。

② 平成27年度

前年度に引き続き、幼児を対象とした参与観察・アクション・リサーチを行い、幼児個別のラーニング・ストーリーを作成することにより、新たな学びの指標作りを行う。また、その効果について検証する。学びの指標としての「学びの構え」(disposition)の他に、「繰り返すパターン」(schema)についても調査、研究を行う。くわえて、再度、ニュージーランドにおいて、学びの指標、ラーニング・ストーリーについて調査をする。

③ 平成28年度

幼児の参与観察・アクション・リサーチについては、子どもの3年間の変容を意味づける上からも、継続して行い、それにおける学びの指標の妥当性を検証する。また、日本版の学びの指標と保育記録、日本版ラーニング・ストーリーの記録モデルの構築を行う。

3. 研究経過

(1) ニュージーランドにおけるラーニング・ストーリーの調査研究

- ① 調査期間 平成26年8月30日～9月5日
- ② 調査施設
 - Royal Oak Childcare Centre
 - Shining Starz Early Childhood Education Centre
 - Browns Bay Taiaotea Kindergarten
 - Mangere Bridge Kindergarten
 - New Windsor Playcentre
 - Glendowie Primary School

・ University of Waikato

- ③ 調査方法 半構造化インタビュー、デジタルカメラ・ビデオカメラによる録画記録。各施設の責任者とのインタビューおよびカー教授のレクチャー記録分析

④ 考察

ア. ラーニング・ストーリー

ラーニング・ストーリーは、保育所、幼稚園、プレイセンター（親が運営する施設）、どこの保育施設でも記述されていた。このような記録は一見すると、ポートフォリオのようであるが、ラーニング・ストーリーは様々な記録を集めたものではなく、子どもの学びを評価するものである。その評価の観点は「**disposition**（学びの構え）」として、5つの観点で示されている。ラーニング・ストーリーはこのような評価指標を用いながら、積極的に学びに向かう自己を育てようとしていることが確認できた。同時に、この記録においては、多様な目、ニュージーランドの保育者の言葉を借りるなら、多様なレンズで、子ども一人一人を捉えていくことが重要であり、互いに職員同士が話し合い、子どもの行動を肯定的に見ようとするのが何より大切であり、その上で子どもへの援助を考えることが必要不可欠である。また、現地を調査していて、もう一つ、スキーム（**schema**）という指標も活用していることが明らかとなった。

イ. スキーム（**schema**）

ニュージーランドの保育施設で、ラーニング・ストーリーを記録する際の観点として、前述の「**disposition**（学びの構え）」と同時に、「**schema**（子どもが繰り返すパターン）」が紹介された。ここでいうスキームとは、子どもの遊びを通して現れる彼らの考えや思考を表す繰り返される行動のパターン（**patterns of repeated behaviour**）である。このような子どもが繰り返す行為が子どもの内的認知構造を作り上げる。このようなスキームが生み出すのは物事への集中・没頭（**Involvement**）であり、フロー（**Flow**）であり、持続的な粘り強さ（**Persistence**）である。このような物事への集中・没頭の体験が物事への探究を生み、学びへの芽生えを誘発していくのである。この意味で、子どもが繰り返すパターンとしてのスキームも、ラーニング・ストーリーでは、子どもの学びの評価の指標となる。

ウ. ナショナルカリキュラムとしてのテ・ファリキ

テ・ファリキとはマオリ語で織物を意味する。このテ・ファリキが共通の保育の土台となっている。このカリキュラムには4つの原則と5つの要素がある。

◎ 4つの原則

- ・ **Empowerment**（エンパワメント、子ども自身が力をつけること）
- ・ **Holistic Development**（全人的発達）
- ・ **Family and Community**（家族とコミュニティの中で育つこと）
- ・ **Relationships**（関係性をつなげる学習をすること）

◎ 5つの要素

- ・ **Well-being**（心身の健康）
- ・ **Contribution**（貢献 子どもの学び）
- ・ **Exploration**（体験による探究）
- ・ **Belongings**（所属感 子どもの個性と性格）

- 内田伸子 「幼児のリテラシー習得に及ぼす社会的要因の影響」 お茶大・ベネッセ共同
研究報告書 2012年
- テルマ・ハーマス 埋橋玲子 訳 『保育環境評価スケール』 法律文化社 2004年
- カー 大宮勇雄 訳 『子どもの学びをアセスメントする』 ひとなる書房 2013年